卒業論文要旨

# 栃木県大田原市の地理的性格とその変化

阿久津　朱　未

長年慣れ親しんできた故郷である大田原市を，調査の対象に選び，改めてその地域像を明らかにすることとした。

本論文では，対象地域を２つの視点から分析・考察を行った。その目的は，大田原市域全体の特徴をとらえることと，もう１つは，旧来の集落である大田原，すなわち現在，大田原の市街地となっている地域がもつ機能・構造を知ることにある。方法としては，聞き取り調査，文献，統計・資料調査の他に，農林業センサス集落カードや，アンケート調査からの作図と読み取りを行った。

大田原市は，那須扇状地の扇端に位置する，人口46,000人の地方中心都市である。中世の城下町として発展し，江戸時代には，奥州街道の宿場町として繁栄した。明治時代となり，行政的にも県北の中心地となったが，国道４号線が敷設され，東北本線が開通すると，それらは大田原を大きく西に迂回してしまい，大田原市にとっては大打撃であった。最近開通した東北自動車道や東北新幹線にも見離され，大田原市は，交通体系上不利な条件にあるといえる。しかし，周辺商圏との関係を見ると，現在でも大田原が県北の中心地なのである。明治期までに確立された，経済的行政的中心性が，伝統的に保持されているためであり，大田原は，地理的習慣性のある都市と考えられる。

ところが，大田原には，特色ある商品生産というものがなく，商品の生産地というよりも，商品の集散地であるということができる。古くからの商店街は，１～２人で経営している小規模な小売店が，数100mに渡って並んでいるが，どの通りも似たような業種構成で，客を引き付ける魅力に欠ける。しかも，殿様商売と言われるような接客態度が見られ，独自の商店街が発展しつつある黒磯や西那須野からの客は，今後次第に減少するであろう。また，最近では，大型店が古くからの商店街の周囲に開店し，その周りには，喫茶店などの新しい店が進出しており，大田原の市街地は，圏構造を示しながら，外側へ広がるという特徴を見せている。特に，西那須野，矢板，黒磯へ至る道路に沿って延びており，大田原の商店街は，北西部へと拡散しつつある。

大田原市の経済力を支えているのは，商業よりも，市街地の周りに広がる農地を背景とした農業である。本市の農業は水田が中心で，農作物の75.5%が稲となっている。畜産も行われており，金田地区で乳牛，親園地区で肉牛を飼う農家が多い。昭和30年代前半までは，馬が畜産の中心で，牛や豚，鶏は，自給的に飼育している農家がほとんどであった。40年代に入ると，馬は姿を消し，畜産を行う農家も減少したが，代わって，牛，豚，鶏を商業的に飼育する農家の割合が高くなり，アグリビジネスを行う団体や事業所も増えている。

大田原市は，農村的性格が強く，戦後40年代まで，人口が流出を続けていたが，こうした人口減少に歯止めをかけたのが，自治体による工業誘致である。農村地域からは，現在でも人口流出が続いている一方で，工業地域には，工業誘致によって，工業労働力が流入しているといった二重構造を，大田原市は呈しているのである。それぞれが無関係に進むのではなく，農村の余剰労働力が，工業に吸収されるよう，自治体の田園工業都市構想に期待したい。

# 福島県における昭和55年の水稲冷害

石　川　敦　子

## 研究目的と方法

昭和55年の大冷害は，技術の進んだ現在でも，冷害が決して過去の問題ではないことを証明した。本論文はこの昭和55年の冷害を取り上げ，その経過・被害の様相・農家に与えた影響を明らかにすることを目的とする。その際，特に地形的に